

中越沖地震 現地調査レポート

2007年7月18日、中越沖地震発生。能登半島地震の際と同様に閲覧登録のあった組織へ支援可能内容調査を実施、また、現場ニーズとの調整を図り、被災自治体の新潟県へ調達情報の提供を行いました。

また、現地調査では、柏崎第一中学校、柏崎小学校、刈羽村第二体育館などを見て回った。このとき、地震発生から10日経ち柏崎市では水道は約80%が復旧し、水洗トイレも利用できる状態にあり、避難所の雰囲気は比較的落ち着いていました。

下水道の損壊状況は確認できていないとのことだったが、前回被害を受けて修繕した場所は損壊がなく、逆に前回被害を受けていない場所が損壊していたようでありました。このような状況から、27日時点では、水使用はできるだけ控え、手洗いや風呂等は仮設の施設を利用していました。

現地の行政の方の話では、地震発生後2日目には、ほとんどの避難所に仮設トイレが設置され、5日目には、必要な仮設トイレ数を確保できたという。中越地震を経験していたこともあり、トイレの調達・配備は比較的スムーズに行われたようでした。

また、今回調査した避難所では、トイレの利用や清掃の実施、消毒液の配備が徹底されており、トイレが清潔に保たれていました。

実際の清掃はボランティアが中心となり実施していました。トイレ掃除を毎日、熱心を実施する姿勢を示すことは、被災者に元気を与えると同時に、ボランティアと被災者のコミュニケーションのきっかけにもなるため、避難所運営においてとても効果的です。

野外活動施設を使用した後にトイレ掃除して帰るように、避難者自身が交替でトイレ掃除ができるようになると、トイレが生活再建のきっかけにもなるとおもわれます。



消毒液



手洗い場所



トイレ清掃

刈羽村第二体育館では、発災直後に役場職員が駆けつけ、水洗トイレ利用を禁止し、備蓄してあった簡易トイレ・携帯トイレ（便袋式トイレ）、そして消毒液とウェットティッシュの利用を指示したことから、トイレはとても上手く運用されていました。

もし、水洗トイレの水が出ないことを気づかずに利用してしまうと、トイレが汚れ、携帯トイレの利用が出来なくなるため、このような素早い対応は非常に重要です。



仮設洋式トイレ

今回の被災地域には、高齢者が多く、日常的には水洗トイレの洋式便器タイプがほとんどでしたが、避難所に設置された仮設トイレは和式が多くありました。

平常時、仮設トイレは工事現場やイベントでの利用が中心であるため、和式が多いのはやむを得ないが、今後は洋式トイレの普及も検討する必要があると思われる。

また、仮設トイレは、組み立て式と異なり、設置後すぐに利用できることと、ペーパーや消臭液等をセットした状態で現場へ持ち込めることから、とても重宝されるが、スペースが狭い、余震で揺れる、くさい、段差があるなどは、相変わらずの課題です。

また、現場ニーズに合わせて、仮設トイレを設置するため、設置場所が的確に把握しづらく、結果的にバキュームカーでの汲み取り計画が難しくなることも課題です。

現場の方から、「いざ！というとき、トイレは食糧・水より先に必要」という言葉を聞きました。食べなくても排泄は生じます。それにもかかわらず、トイレは忘れられがちです。

災害時は、食べる時も寝る時もみんなと一緒にいるため、唯一ひとりになれる空間がトイレです。安心して排泄ができ、気持ちが安らぐ空間となるよう災害時のトイレ改善に努めていきたいと思います。



携帯トイレ



簡易トイレ

日本トイレ協会